

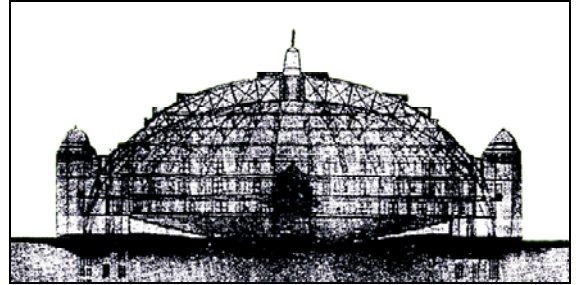
— 世界最大の大ドーム相撲常設館 —

著者：学会会員 清水健次

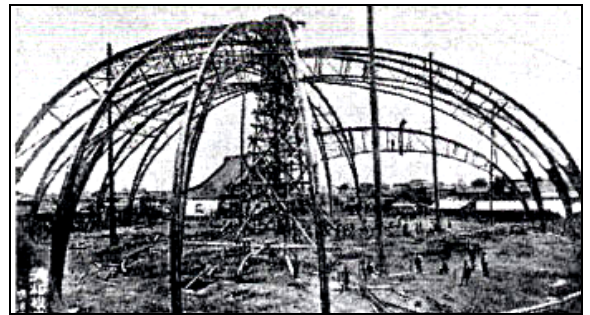
辰野金吾の設計により1909年に建てられた、わが国最初の相撲常設館は、竣工当時世界最大のドームであった。平面は直径約60mの円形平面とし、屋根を鉄骨トラス構造であった。トラスの概観は楕円形で、温度変化による伸縮や耐震性を考慮して鋳鋼製沓金物によって基礎にピン接合された。観客席は、屋根トラスとは切り離し、独立柱を建てて3層構造とした。収容人数は1万人を超えるものであった。

当時、大相撲は年2回、10日間のみであったため、このドームは多目的に使用するよう考えられ、曲馬、自転車曲乗り、玉乗り、武術、テニス、クリケットなどの試合場として、また、春は博覧会、夏は納涼大会、秋は菊人形展などに活用された。

この常設館は、竣工後の1917年に失火したが1920年に再建。第2次世界大戦中は、1944年1月場所を最後に相撲が中止され陸軍省の管轄となった。戦後は、占領軍に接收され「メモリアルホール」としてダンス場等に使用され、1952年に接收解除された。1953年からは、「国際スタジアム」と改名、ローラースケート場に、1955年からは日大講堂として活用されたが、1982年に使命を終えて解体され数奇な歴史の幕を閉じた。



断面図



鉄骨建方中



竣工当時の相撲常設館



第二次世界大戦後占領軍に接收、「メモリアルホール」となる



接收解除後「国際スタジアム」と改名